

これまで書き綴ってきたブログの中で  
今、忘れられているゴルフプレーや、  
エチケットのことに触れた文章を抜粋  
してみました。

# ゴルフは 知の芸

嫌われないゴルファーに

なるために

何よりもマナー・エチケット

奈良柳生カントリークラブ 阪口 勇

## 目次

<b>2014年</b> .....	
・ ゴルフルールで疑問に思うこと .....	2
・ ゴルフマナーを大切に.....	3
・ スタート前の段取りについて.....	4
・ ボールはあるがままに打て .....	6
・ 雨傘の取り扱いについて.....	7
・ 英国のリンクスコソゴルフコースの原点 .....	8
・ ゴルフは楽しい、そして面白い.....	9
・ 何ゆえにゴルフは紳士のスポーツといわれるか .....	10
・ 球聖ボビー・ジョーンズのエピソード.....	11
・ ローカルルールの悪法「前進4打」「6インチプレス」 .....	13
・ 雨の日に思うこと .....	14
・ ゴルフの和製英語について .....	15
<b>2015年</b> .....	
・ ルールをしっかり身につけよう .....	16
・ スロープレー問題を考える .....	17
・ ゴルフに出会えたことに感謝.....	19
・ 同伴者を意識せずパーおじさんに挑む.....	20
・ 真のゴルファーは減った.....	21
・ ゴルフは健康に良いは本当だった .....	22

## ゴルフルールで疑問に思うこと。

2月も終わり今日から3月です。寒々としていた2月のゴルフ場でしたが、3月の声を聞くと皆さんゴルフの虫が騒ぐのかエントリーも活発に入ってきています。いよいよ球春到来です。

ところでゴルフルールについて日ごろから疑問に思うことがあります。グリーン上のピッチマーク（ボールマークともいう）は直すことがルールでは許されています。許されているというよりもマナー・エチケットで自分がつけたピッチマークは直さなければならないはず。

しかしながら、先行組のプレーヤーがスパイクを引きずったりした引っかき傷を直すことをルールは認めてません。なぜなのか私には理解できません。会合などで関西ゴルフ連盟の競技委員の方と一緒にいる機会があった時に、その疑念を伝えると「私もスパイクシューズ跡の修復がなぜルール違反になるのか判りません」と明快な答えを返してくれません。

グリーン上の芝の不整の修復に関してピッチマークがよくてスパイクの引っかき傷などを直すのがなぜいけないのか理解できません。スパイク跡の修復が駄目なら、悪意？あるプレーヤーが後続組のプレーヤーに対する嫌がらせ、あるいは不利なグリーン面を意図してスパイク跡をつけて行くことも可能です。

もちろんゴルファーはみな誠実で不正を行わない性善説が前提ですから、そのような行為・行動はしないと思いますが・・・・。

当クラブの二人のプロにスパイクの引っかき傷などを直してはいけないルールの根拠は何か？と問うと二人とも「なんででしょうね。私らも判りません。パットライン上の不整を直すことが特別有利になるとも思いませんけどね」の答え。

なぜライン上のスパイク跡などの修復をしてはいけないのか、どなたかご存知であれば教えてください。

## ゴルフマナーを大切に

ゴルフを楽しむためには、一人一人が自覚を持ち、マナーと礼節をわきまえながらプレーすることが大事であると説くゴルフマナー研究家の第一人者・鈴木康之氏の「ピーターたちのゴルフマナー」（ゴルフダイジェスト社発行）を久しぶりに読み返しました。ゴルフ業界に勤めて40余年、いろいろなゴルファーの姿を見てきました。ゴルフの上手下手よりも他人やコースを思いやるマナーに長けたゴルファーこそが尊敬に値しますが、残念ながら尊敬に値するゴルファーは絶滅の危機に瀕しているようです。

ゴルフマナーとはゴルフの伝統的精神にのっとった本来的な作法や紳士淑女としての普遍的な礼儀作法であり、時代の移り変わりを越えて尊ぶべきものである。たとえば他のプレーヤーへの配慮やコースを大事にする努め、さらにはコースに職業や地位を持ち込まない平等の精神など同氏は説いています。

マナーを知らないとどうなるか？打ち方のミスはスコアではね返せる。続行不可能なミスショットをしても、ペナルティを払ってルールで救済される。ルール違反でさえもペナルティを払って許される。ところがマナー違反には救済や許しの決まりはありません。マナーを知らないと、ゴルフができなくなることを皆は知らないという。

マナー知らずは人に嫌われ、仲間が少なくなり誘われなくなります。それは人のプレーを妨げ、人を不愉快にさせるからです。ゴルフは誰もが誰とでも一緒にゲームを楽しめるスポーツです。シングルとビギナーでも男性と女性とでも、さらには若い人とお歳を召した人とでも一緒にプレーを楽しむことができます。そのためにはゴルファーとしてのマナー・エチケットをちゃんとわきまえていることが前提条件となります。マナーにはその人の人格が表れると鈴木康之氏は書いています。

ゴルフは上手いが無作法なゴルファーよりも、下手でも人を思いやる、他人に不愉快な思いをさせないゴルファーこそが尊敬に値いすると思います。鈴木康之氏の著書からの受け売りです。

## スタート前の段取りについて

“マナーを大切に” は、かなりの反響がありました。ご覧いただいた方から「タメになりました。ゴルフは上手いだけでは駄目ですよ。ゴルファーとしての品格、品性を備えないと。あのブログを読んで反省しました」というような声が結構寄せられました。確かにゴルフは上手いが、自分本位で周りの空気も読まない自己中なゴルファーや粗野なゴルファーが多いです。ゴルファーひとり一人が自覚をもち、マナーと礼節をわきまえてプレーすることが大切ですよね。

本日はクラブ三大競技のひとつ理事長杯の予選が行われました。競技委員とともにスターターの席に座りスタートを見送りました。13組50名が予選に出場しました。時間に遅れることなく皆さん順調にスタートしていきました。

今回は鈴木康之氏が書いてる「スタート時間」についてご紹介しましょう。

「スタート時間とは、プレーヤーがスターティングホールティーグラウンドに集まる時間ではなく、オナーがアドレスに入る時刻のことである」と教えています。確かにスタート時間といえば漠然とスタートするティーグラウンドに集まればよいというような認識をもつゴルファーは多いようですが、鈴木氏は次のように明確に記しています。

「プレーヤーがティーグラウンド脇へきてからオナーがアドレスに入るまでには、数多くの段取りがある。だから、ティーグラウンド脇へ集まる時間は、スタート時間よりずっと前でなければならない」とあり、スタート前の必要な段取りとして

- ①同伴競技者とキャディがカートの周りに集まり、自己紹介などの挨拶。
- ②スコアカードに同伴競技者の名前を書き込む。
- ③キャディが4人それぞれのクラブ本数や番手を確認。
- ④ボール、ティーペグ、ボールマーカー、グリーンフォークなどをポケットに用意。
- ⑤同一ブランドのボール使用者がいないかの確認。
- ⑥打順を決める。
- ⑦初めてのコースなら、プレーの進行上の決まりごとやヤーデージの見方、戦略上の注意やサゼスチョンをキャディに聞く。
- ⑧素振りは素振りをしていい場所で行う。

一部除外していますが、なるほどスターティングホールですべき段取りは結構あるものです。当然この段取りに3、4分はかかります。前組がスタートしたら後続の組のオナ

ーは速やかにティーアップしてプレーの用意ありの意思を示さなければなりません。そのためには後続組のオーナーを決める必要があります。だから前述の①～⑧までのことは事前に済ませておかなければなりません。しかし、前組のプレー中は話し声や物音を控えなければいけませんから、スタート時間の10分くらい前に集まりスタート前の段取りを済ませておかなければならないと鈴木氏は書いています。

スタート時間の10分前にクラブハウスに到着し7分前にフロントでチェックインしながら「(スタートに)間に合った」という方がいますが、もってのほかと言わざるを得ません。胸に手を当て心当たりのある方は、以後お気をつけていただきますように。

## ボールはあるがままに打て

‘ Play the ball as it lies ’（ボールはあるがままに打て）即ちノータッチプレーがゴルフゲームの基本であることは皆さんよくご存知だと思います。コースコンディションの悪いゴルフ場やプレーの進行を早めるためにスルーザグリーンに限って6インチプレー適用をローカルルールで表示しているゴルフ場があります。プライベートコンペでも6インチOKにしているケースもあります。

ゴルフというスポーツの面白いところは自身の実生活や人生で遭遇する出来事を教訓的に経験できるところにあります。素晴らしいティーショットが狙い通りフェアウェーに飛んだのに、セカンド地点のボールの所に行ってみると不運にもディボット跡にすっぽりはまっていることがありますし、落下したボールがスプリンクラーの蓋に当たって跳ね返り木の根っこに止まったりすることが多々あります。なんという不運、ナイス（グッド）ショットしたのに・・・なんという不公平かと嘆きたくなります。

しかしこの不公平こそがゴルフのスリリングな面白さであり、実生活への教訓的な試練でもあるのだと我が敬愛する鈴木康之氏は書いてます。さらに氏はナイスショットの功と不運を取引して6インチ動かすようなルールを適用してはならないと断言しています。たとえローカルルールで6インチの適用を認めていても、そこ（ディボット跡や木の根っこなど）に打った自分が悪いのだと切り替え、この苦境からいかに脱し、最小限の被害（スコア）にとどめるか、最良の手立てを考えることこそゴルフを楽しむに値するゴルファーだといっています。

ゴルフには運・不運はつきものです。ショットだけでなく、組合せで同伴者との相性やついたキャディの良し悪しなどゴルフには際限なくあります。幸運なショットやパットもあれば、アンラッキーなこともたくさんあります。ゴルフはいかにラッキーを継続させるか、また不運に見舞われたら不運の連鎖に陥らないように、最小限の被害でいかに正常に戻すかなどゴルファー自身の精神力、判断力が問われるスポーツです。これこそがゴルフの面白さであり、他のスポーツにない知的スポーツだといわれてる所以でもあります。甘言に惑わされず、あるがままに打つを忘れずゴルフを楽しんでください。

## 雨傘の取り扱いについて

6月4日に早々と梅雨入りしたものの、比較的好天気が続き、雨が降っても夜の中に降り朝には雨が上がっているという具合に、ゴルフ場関係者には好都合な天気が続いていました。しかしながら本日は、昨夜からの雨が降り続き予報では夕方近くまで降るとのこと。せっかくの日曜日のゴルフが雨中プレーとなり残念ですが、幸い雨量は少なくレインウェアを着るほどでもないようです。

雨の日のゴルフは誰でも嫌なもの。しかしながら自然の中で行うゴルフは雨、風、霧といった悪天候は自然のハザード。悪天候から逃げたくなるのは我侭です。365日、晴天が続くわけがありません。雨の日のゴルフは快適とはいえませんが、天が与えたハザードに果敢に挑戦する強い心を持ちたいものです。

雨の日のプレーといえば傘がつきもの。プレー中の雨傘の取り扱いについて日ごろ気になっていることを少し書いておきます。昔は自分の雨傘を持って行きましたが、今はゴルフ場のサービスとして無料（昔は有料貸傘）が当たり前となっています。それだけに雨傘は借り物であることを頭におき、丁寧に扱うようにしたいものです。

雨傘は、ショットする際に下に置きますが、その時は開いたままでなく必ず閉じて置くように心がけてください。風の強い時など開いたまま置いておくと、傘が動いたり飛んだりしてプレーの邪魔になりますし、風に飛ばされて傘の骨が折れたりします。借り物の傘だから別に構わないという気はないでしょうが、往々にして乱暴に取り扱いがちです。借り物だからこそ、より丁寧に扱うようにお願いします。

それとグリーン上での雨傘の置き方ですが、旗竿、クラブと同じように傘も原則グリーン外に置くように心がけてください。グリーンにやむ得ず置かなければならない時は、開いたままでなく必ず閉じてそっと置くようにしてください。開いたままグリーン上に置いていて風に吹かれて飛ばされた際、傘の先がグリーンを傷めたりすることがありますので、極力グリーン外に置くようにしてください。

## 英国のリンクスコソゴルフコースの原点

全英オープンを今年もTV観戦しました。期待の松山英樹や石川遼ら日本人選手も果敢に挑みましたが、あのタフなリンクスに返り討ちにあってしまいました。

毎年、全英オープンが行われるリンクスは、アメリカや日本のゴルフ場のように人工的に整備されたゴルフ場とは違い、灌木、草むら、クリーク、穴地といった自然の地形を100%生かしたネイチャーコースです。これに加えて強い風や雨などの自然現象を含めて戦わなければならない。庭園化された日本のゴルフ場で育ち、主戦場として戦う日本人プロが1週間前にリンクスにきて数回の練習ラウンドで勝てるほど甘くはない。

ゴルフ作家・鈴木康之氏はリンクスのことをこう書いてます。

「英国ではリンクスコースのことをネイチャー・コースといい、人工的なコースとは同一視しない。ここにみだりに人工的な手を加えることは神物冒瀆だといまだに言われている。ネイチャー・コースの地上にある隆起、穴地、クリーク、灌木などのすべて、風、雨など空中に起こるすべてはゲームに欠かせないハザードであり、愉快の要素として楽しむ。自然のアンジュレーションを生命とする球技はゴルフしかないのではないだろうか。

リンクスから世界にゴルフが広がった過程で、コースは庭園化した。ネイチャー・コースがあまりにも困難なために、易きに走った。それでもなおゴルフ・プレーはままならない。ゴルファーたちはプレーの仕方すらも易きに走りたがってきた。今日私たちいるのはそうした過程の先にある世界だと考えてチェックし、本来を忘れないように努める必要がある。

野っ原があり、ここがグリーンと場所を定め、穴を一つ空ければホールとなってゴルフができる。3ホールもあれば十分だ。六回まわれば正規の1ラウンドだ。クラブハウスはいらない。友だちがいればいい。取り決めは、ボールを打って、より少ない打数で穴に入れたほうが勝ち。いったん打ち出したらボールには触らない。打てないところに転がったら、罰打を払い、有利にならないところから打ち直してプレー続行。そうと決めたら握手してティーオフだ。これがゴルフの原点である。今でもこれで十分である。」

易きに走らないノータッチ、自分に厳しくこそがゴルフの精神であることを忘れず楽しんでください。

## ゴルフは楽しい、そして面白い

ゴルフというスポーツは実に楽しい、そして面白い。何故にかくも楽しく面白いのだろう。ティーグラウンドに立ち青々とした広大なフェアウェーに向かって放つショットの醍醐味、爽快感は当然ですが、その放たれたボールの行方によって面白さはさらに倍増します。

ティーショットしたボール全てが全てフェアウェーの真ん中に行くわけではありません。プロやシングルゴルファーでも7割の確率で行けば御の字。スコアが90～100の月イチゴルファーなら18ホールで2、3発会心のショットが出る程度でしょうか。放たれたボールがナイスショットであっても落ち所によってはディボット跡に止まっていたり、スライスやフックしたボールが林の木に当たって跳ね返ってフェアウェーの真ん中に止まっていたりします。

ゴルフという人事の及ばない運不運こそがゴルフの真髄であり、奥の深い面白さといえます。木の根っこに止まったボールに対して被害を最小限にとどめるべく対応するか、一か八かのギャンブルで刃向って行くかといった局面が18ホールのプレー中には何度も遭遇します。この運不運への対応処理能力こそがゴルファー自身の人生における現実対応能力を表わしています。

ゴルフというスポーツは審判のいないプレーヤー自身がルールに則り自己申告するスポーツです。ゴルファーは嘘はつかない正直を前提としたゲームです。ホールアウト後のスコアは自己申告を旨とし池に入れたりOBを打てばしかるべく罰打を付加すればプレーは続けられます。不正行為や虚偽申告には罰打はつかない代わりに失格という重いペナルティが付くだけでなく、人間性まで疑われ友情や信頼を失くしてしまいます。

取引先や会社の上司・部下などとのゴルフの機会もあると思いますが、立場はどうあれ同伴プレーヤーのこうしたプレーぶりを見て性格やら人間性がよく分かります。スコアにこだわり周りが見えないゴルファーが増えています。同伴者はこうしたプレーヤーの一挙手一投足をよく見ているものです。お気をつけて下さい。

## 何ゆえにゴルフは紳士のスポーツといわれるか

数あるスポーツの中で競技規則の第1章に「エチケット」「コース上の心得」が明記されているのは恐らくゴルフだけです。ゴルフはいかにエチケット・マナーを重んじられるスポーツであるかということがよく分かります。ゴルフは技術以前に人間性が問われるスポーツであることを最近のゴルファーは知らないように思えます。

ゴルフの上手い下手というよりプレーを通じて同伴競技者といかに楽しく愉快地に過ごすがゴルフというスポーツの妙です。老若男女が同じステージで楽しめるゴルフは、技術の巧拙よりもエチケット・マナーを遵守することこそが基本条件です。ゴルフの上手下手よりも人間としての品性・品格こそがゴルファーに求められます。

品性・品格とは、まず人を不愉快にさせない気遣いと常識をもった振る舞い、そして場の雰囲気を読み空気を和ませる会話や行動をもつ人といえるでしょう。いわゆるジェントルマンと評される人物のことです。よく「ゴルフは紳士のスポーツだ」といわれます。

クラブハウス、コースなど限られたゴルフ場のスペースで多くのゴルファーが集います。ひとり一人のプレーヤーが快適によりスムーズに楽しむために、安全かつ迅速にプレーしていただくために、他のプレーヤーへの配慮や心遣い、そしてコースをいたわり大事に使う気持ちがゴルフ規則の第1章「エチケット」の条文になっているのです。

最近はこうしたゴルフ本来のエチケット・マナーが継承されずにゴルフの巧拙で判断してしまう風潮があります。ゴルフは下手と上手と一緒に回って楽しめるスポーツです。ゴルフは下手でも同伴者に迷惑をかけない気遣いやプレーのペースを狂わせないようなプレーをすればいいのです。逆にゴルフの腕前はシングルクラスであっても自己中心的なマイペースで同伴者と協調できないモンスター・ゴルファーが増えてきたように思えます。

敬意を払われるゴルファーというのは、けっしてゴルフが上手いからではなく、同伴競技者を含めてその場の空気を和ませる会話や振る舞いを身につけている人こそ尊敬に値するゴルファーであることを肝に銘じていただきたいものです。

## 球聖ボビー・ジョーンズのエピソード

50数年前までは「ゴルフは紳士のスポーツ」といわれていました。しかし高度経済成長期やバブルを経て「ゴルフは完全に大衆化スポーツ」になりました。

ゴルフは紳士のスポーツの`紳士`を強調するのはプレー料金が高く高嶺の花であったこともありますが、高貴なスポーツであるという意味も含まれています。何よりもジェントルマンシップに則ったスポーツであるからこそ`紳士のスポーツ`といわれていた所以です。

昭和40年代からゴルフが大衆化するとともに、ゴルファーのマナーやエチケットが乱れに乱れています。ゴルフという競技は審判のいない自己申告即ち、自らの行動は全て自らが負う自己責任を旨としたスポーツです。

審判がいないことを良いことに不正やズルをする輩（やから）が後を絶ちません。ナイスショットした球がディボット跡にあれば誰も見ていないことを良いことに数センチ蹴り出したり、OBラインの外にある球を「セーフ！」と叫び同伴者の確認を待たずにさっさと打ち出したりと、この手の話は枚挙に遑（いとま）がありません。

このような明らかなルール違反ではないものの、同伴者や前後のプレーヤーに対する気遣いや配慮に欠けた無神経なプレーヤーも増殖しています。恐ろしくプレーの遅い人、あるいはグリーンにボール跡をつけたにもかかわらず修復しない人、ゴルフシューズでグリーン面を引きずって傷つけたりする非常識なゴルファーも増殖中です。

こうした非常識なゴルファーの振る舞いを見たり聞いたりする度に思い出すのが球聖ボビー・ジョーンズのエピソードです。

1925年の全米オープンでのこと。B・ジョーンズは1打リードで優勝に限りなく近かったのですが、ラフにある球をアドレスした際に球が動いたと自己申告して自ら1打罰付加してスコアカードを提出しました。この結果、プレーオフとなり敗れて優勝を逃してしまいました。アドレスの際に球が動いたのを誰も見ていない、B・ジョーンズが申告しなければ誰も判らず1打リードのまま優勝していたかもしれません。

このB・ジョーンズの行為に人々は賞賛したといいいます。しかしB・ジョーンズ曰く「ゴルファーとして当たり前のことをしてだけ。人のお金を盗まなかったからといって、

私を褒めるのはおかしい」 と平然と語ったといいます。

プレー中に悪魔のささやきが聞こえてきたら、このB・ジョーンズの言葉を思い出してください。

## ローカルルールの悪法「前進4打」「6インチプレース」

ローカルルールの悪法の最たるものは「プレイング4」と「6インチプレース」だろう。プレイング4とは、ティーショットをOBした場合、プレーの進行をスムーズに行かせるため、前方特設箇所（特設ティーとしている所もある）から打って4打（プレイング4）としてプレーする救済措置です。いわば体のいい遅延防止策です。

確かにビギナーが何度も何度もOBを繰り返せば同伴競技者はもちろん、後続組も詰まってしまうコース内は込み込みになってしまう可能性があります。だからといってティーショットをOBした者が特設箇所からプレイング4でプレーを続行するというのはいささか腑に落ちません。

ゴルフというゲームはティーグラウンドからティーショットしたボールをグリーンのカップにカップインして打数を競うものです。それをティーショットしたボールがOBだったからボールを手にもって特設箇所に歩いて行く。ゴルフはティーショットしたらグリーンに上がるまでは一切ボールに触れてはいけないという大原則あるにもかかわらず、ティーグラウンドから特設箇所までボールを持ち運ぶのは、ゴルフの本筋から外れているように思えます。

ビギナーの救済措置ということもあるかもしれませんが、一律OBは特設箇所からプレイング4ではなく、せめて打ち直しかプレイング4かを選択する権利はプレーヤー自身に判断させるべきだと思います。

もうひとつの悪法「6インチプレース」。こちらはコースを保護するため、あるいはコースコンディションが劣悪な状態だから6インチの範囲内でボールを動かしても良いというもの。ゴルフはあるがままの状態（ライ）でボールを打って行くのが大原則。芝の張り替えた箇所や発芽前や発芽中の芝を養生するための限定的範囲なら修理地にするべきで、コース全体6インチにするというのは、「18ホールのコース状態がノータッチでプレーできない最悪のコースです」とゴルフ場自ら公言しているようなものです。

## 雨の日に思うこと

ゴルフはご存知のように自然の中でプレーを楽しむスポーツです。暑さ寒さはもちろん風が吹いたり雨が降ったりと自然の変化に対応して行くところにゴルフというスポーツの妙味があります。

とはいえ、ゴルフ人口の7割近くを占める60歳以上のシニア世代には、もはやこの理屈は通用しなくなってきました。暑い夏や寒い冬それに雨が降れば「健康管理のためにゴルフをしているのに、過酷な気象条件の中でゴルフして体をこわしては元も子もない」などの理由で簡単にキャンセルされる方が多くなってきました。

血気盛んだった壮年時代にゴルフに夢中になった団塊世代も暑さ寒さに加えて雨風に簡単にギブアップしてしまいます。雨のゴルフは快適とはいえませんが、帽子やレインウェア、シューズ等々ゴルフ用品も年々優れた商品が開発され市販されていますのでそれなりにゴルフも楽しめるはずなんですがねえ。

エントリーした日がいつもいつも晴れの日や春・秋の爽やかな日ばかりとは限りません。その日が雨であったとしても大自然の厳しさに対峙して堂々と立ち向かって行く気概を忘れずにゴルフを楽しみたいものです。

昨日は今冬一番の寒さで、近畿でも雪が降ったようです。奈良県でも阿騎野GCでは積雪のためクローズになったとか。オークモントGCやヤマトCC、春日台CCなど標高400メートル以上のゴルフ場は朝方に薄っすらと積雪があり、スタート時間を遅らせたとのことでした。

## ゴルフの和製英語について

ゴルフの和製英語を批判したりウンチクを語るゴルファーを時折見かけますが、和製英語に目くじら立てて正しいゴルフ英語を使わなければならないのかなあと時々思います。ここは日本であり、日本のゴルフ場でプレーする限りにおいては和製英語であっても互いに意味が通じればよいと思うのですが・・・・・・・・。

ティーショットが真っ直ぐ遠くに飛ばば「ナイスショット！」いいじゃないですか。これをしたり顔で「ナイスショットなんて日本だけで通用する言葉、本当はグッドショットといわなければいけないだよ」と訳知り顔でのたまう人がたまにいます。

テレビのゴルフ中継でもグリーン上のパッティングで、やや右に切れるのを「スライスライン」、左に切れるのを「フックライン」などアナウンサーや解説者が使っていますが、これも和製英語で本来のゴルフ英語ではありません。一緒にテレビ観戦している訳知りゴルファーは「スライスやフックラインという言い方は間違いだ。スライスやフックというのはクラブで打ったボールが空中で大きくそれて右にカーブするのをスライスボールというのであって、パットしたボールのそれ具合を表現するのにスライスやフックというのは外国では通用しない」とウンチクを披露する方がいます。

こうしたたぐいの和製英語は実に多い。各ホールの最初に打つ人を「オーナー」（正しくはオーナー：名誉）といったり、「ナイスパー」「ナイスタッチ」「ワンオン」「パーオン」などなど数え上げればきりがありません。表彰パーティーで優勝者のコメントで「パートナーに恵まれて」という言葉もよく耳にします。

これだけ多くの和製英語が日本のゴルファーに定着しているのですから、いまさら正しいゴルフ英語を使いなさいは逆に愚かしいと思います。正しいゴルフ英語（用語）を使うべしなどと野暮なことをいわず同伴競技者と互いのプレーを称えあったり、励ましたり、助言（競技ではルール違反ですが）したり、慰めあったりするコミュニケーションの手段として和製英語が飛び交っても良いのではないのでしょうか。

## ルールをしっかりと身につけよう

「クラブ競技に参加する人でルールやマナー・エチケットをわきまえていない人が結構いる」と、時々競技参加者から苦情を聞くことがあります。

ゴルフのルールはルールブックを読んだだけではなかなか理解できません。実際にその場に遭遇してこそルールブックに書かれている処置が理解できるのですが、机上でルールブックを読んだところですぐ理解できるものではありません。

本来、ゴルフルールはもっと単純で、ティーショットしたらグリーン上に上がるまでは一切ボールに触れずに打って行くという単純明快なもので、クリークや池に入ったり、OBゾーンに行ったり、木の後ろや枝に止まったりしてボールを打って行くことができない場合、ルールで救済しプレーの継続を可能にするために制定されているもので、昔はわずか13条だったそうです。

そのわずか13条のゴルフルールが今や34条100項目を超え、付属規則だけでもルールブックの約半分を占める膨大な量になっています。プレーを公正に行おうとするために、様々なトラブルから救済を求める多くのゴルファーの要請に対してルールが制定、改正が行われてきた結果だと思えます。

ルールの救済処置は、プレーを継続させるための救済であって、これを利用して自分に有利に処置することは戒めなければなりません。ゴルフは何よりも「自分に厳しく」が大前提で成り立っている競技ですからルールの欠陥についてインチキを行うことは厳に慎まなければなりません。ルールブックの裏表紙に明記されている次の言葉を肝に銘じて、しっかりルールブックを熟読してください。

球はあるがままにプレーせよ  
コースはあるがままにプレーせよ  
それができないときは、  
最もフェアと思う処置をとる  
最もフェアと思う処置をとるためには、  
ゴルフ規則を知る必要がある

## スロープレー問題を考える

スロープレーはどこのゴルフ場でも悩みの種です。ハーフのプレー時間はおよそ2時間をメドにしているゴルフ場が多い。関西ゴルフ連盟支配人会でもスロープレー防止のためのポスターやマーシャルグッズを制作し加盟ゴルフ場に配布しています。

ゴルフ場のレイアウトや難易度などの差もありますが、ハーフプレーは2時間あれば大体回れるはずです。2020年の東京オリンピックのゴルフ競技の会場を予定している名門・霞ヶ関CCは「ハーフ1時間50分でプレーしてください。」とロッカールームなどに掲示されてます。霞ヶ関CCは乗用カートのない全ホール歩きのプレーで、しかもOBなどは全て打ち直しでありながらハーフ1時間50分プレーを奨励しています。

実際に1時間50分でラウンドできるのかキャディさんに尋ねたところ「皆さん、大体1時間50分までで回ってこられますよ。」とのことでした。しかも霞ヶ関CCのスタート時間の間隔はなんと6分間隔。ふつうは7分間隔、当クラブは8分間隔ですが、コース内で混んだりしないそうです。

話を元に戻して、スロープレー問題ですが、スロープレーヤーが一人いるだけで間違いなく、その組はスロープレーになってしまいます。スロープレーヤーは同伴競技者のみならず後続組にも多大な迷惑をかけてしまいます。

人には一定のプレーリズムがありますし、アドレスしてショットするまでに一定のルーティーンがあります。が、周りから見れば無駄に時間をかけてわざとプレーを遅くしているように見える人もいます。こうしたスロープレーヤーの多くは、残念なことに自分のプレーが遅いと判っていない人がほとんどです。

スロープレーヤーを見ていると相対的に周りの空気を読まないし、他の人に対する気遣いが無い自己中心的なマイペース型の人に多いように感じます。

スロープレーヤーでも工夫次第で早くなります。ボールを打つ以外の作業？を早めるようにすれば大幅短縮になります。例えばティーショットの準備を自分の番までにきちんとしておく。自分の番がきたらさっとティーアップして打てるようにする。次打地点に行く時はあらかじめ目測して2、3本のクラブを持っていくとか、グリーン周りなどでは必ずしも「遠球先打」にこだわらず、本来打つべき順番の人が準備できていなければ「お先に打ちます」と声をかけてプレーすればかなりの時間短縮につながります。

アドレスに入る前に何度も素振りを繰り返す人がいます。これもその人にとってのルーティーンかもしれませんが、何度も素振りを繰り返しても100%うまく行くかといえれば決してそんなことはありません。何度も素振りを繰り返すルーティーンは逆に雑念が入って却って逆効果を招くと倉本プロは言っています。

倉本プロいわく「構えに入ったら3秒以内に打ち終わる」人間がせいぜいじっとしているのは3秒まで、構えて4秒以上かけると頭に思い描いていたイメージが消え失せて筋肉も固まる。だから3秒以内に打ち終わること、と。

## ゴルフに出会えたことに感謝

ゴルフは面白く楽しい、だけでなく難しいし奥が深いスポーツでもあります。ゴルフというスポーツに出会えたことに感謝します。ゴルフを通じていろいろなことを教えられました。

公正・正直・自製の精神を学びました。また挑戦・勇気・向上・計画性といった困難に立ち向かう精神力も養うこともできました。何よりもゴルフは人に対する敬意・思いやり・感謝といった寛容の精神を教えてください。

ゴルフマナー評論家・鈴木康之氏は「ゴルフとの出会いに感謝しよう」でこう書いてます。ゴルフができる幸せ、ゴルフと出会った幸運な人生に感謝しているなど七つの恵みと称して次のように書いています。

まず、ゴルフができる健康な体であること。二つ目にゴルフができる家庭であること。三つ目は仕事の恵み。会社や仕事、商売に破綻があればゴルフどころではない。四つ目は、高いゴルフができる財布の中の経済力。五つ目は、一緒に遊んでくれる友だちがいるという恵み。六つ目は、コースの人たちだ。コースがなければゴルフはできない。そして七つ目の恵みは、ゴルフの先人たちである。かくも面白いゲームを編み出し、営々とその面白さを伝承してきてくれた先人たちに感謝しなければならない、と。

ゴルフがシニア世代の健康管理のための年寄りのスポーツに成り下がっており、若年世代を取り込む名案がないままゴルフ人口が衰退しつつあります。業界挙げてジュニア育成などに注力していますが、アスリートゴルファーを育成するだけでなく、ゴルフを通じて得られる精神や人格形成に役立つことをアピールして小・中・高校生の体育のカリキュラムに組み入れてもらうような働きかけを日本ゴルフ協会など業界団体はすべきだと思います。

## 同伴者を意識せずパーおじさんに挑む

随分前の話で記憶は定かではありませんが有名なゴルファーがっていました（書物で読んだのですが）が、ゴルフというゲームは本来コースのパーに対して挑んで行くものであって、目の前の同伴競技者が相手でも敵でもない。したがって同伴競技者のプレーに惑わされたりせず、平常心でそのホールを攻略して行くことに集中することが肝要だとか。

確かにコース設計者は様々な罠や仕掛けを随所に企てています。手強いコース設計家の意図を見破り安全なパルートを模索し攻略して行くことが知性派ゴルファーの楽しみ方ではないでしょうか。

広大な自然の中に展開する18ホールは、池や小川などの景観美を兼ねたウォーターハザードや人工的な白砂のバンカーを巧みに配置された造形など戦略性と景観性を調和させたコース設計者の造形作品でもあります。

ティーグラウンドからグリーンに向かって淡々とボールを打って行くのではなく、そのホール全体を見渡し設計家の意図する戦略性と景観性を読み解いてからプレーして行くことこそ、ゴルフの奥深さと醍醐味があるのではないと思います。

## 真のゴルファーは減った

あるゴルフ書のPR文か何かで見た記憶がある。それは「ゴルフをする人は増えたが、ゴルファーは減った。ゴルフの醍醐味は、いいスコアを出すことではなく親しい人々を得ることだ」なかなか味わい深い言葉だ。

ゴルフの基本はまずエチケットから始まる。ルールブックは第1章「エチケット」から始まる。50年近く前にゴルフを始めた時、先輩たちから「ゴルフは紳士のスポーツだ。なに故に紳士のスポーツであるか」というとエチケット・マナーを重視し遵守することから始まる」と口酸っぱく教えられたものです。お陰でゴルフというスポーツを通じて社会人としてわきまえるべきエチケット・マナーを身につけることができました。

ところがエチケット・マナーを身につけた先人ゴルファーは減少し、ここ十数年、ゴルフを始める初心者にしっかりエチケット・マナーを教える先輩ゴルファーはいなくなりました。他のプレーヤーの邪魔にならないようにする心配りや安全にゴルフを楽しむための基本的なエチケットやマナーであるのですが、これをわきまえない無知なプレーヤーに善意でもって注意しようものなら「口うるさいゴルファーだ」「何を偉そうに」など反省どころかふて腐れる輩のなんと多いことか。

エチケット・マナーを指導しようという善意のゴルファーは逆に敬遠されるし、さらにはいちいち細かいことを注意する嫌味なゴルファーだと多くのゴルファーから遠ざけられてしまいます。正しいことを教えていながら敬遠されるなど間尺に合わない。だからみんなエチケット・マナーに反した行動をするプレーヤーを見ても黙殺してしまうようになってしまったのだろうか。

## ゴルフは健康に良いは本当だった

TBS系列で放映された三宅裕二司会の「健康カプセル！ゲんキの時間」でゴルフは健康に良いは本当だったと番組内で検証されました。

ゴルフ場経営者の団体である一般社団法人 日本ゴルフ場経営者協会（NGK）がこの番組のスポンサーである興和株式会社から視聴許可をとりNGK会員ゴルフ場にその番組を収録したDVDが配布されてきました。ゴルフが健康に良いといった内容であることから、多くのゴルファーに視聴してもらいたいと付記されていました。

内容をピックアップして紹介しましょう。

片山晋呉プロのトレーナーを務めた筑波大学の白木仁教授によると、ゴルフのスイングでは体幹筋が鍛えられ脂肪燃焼しやすくなるといいます。1日の平均歩数は、男性が約7000歩、女性が約6200歩といわれています。ゴルフでは18ホールで約13000歩とされています。白木教授は歩くことで運動不足が解消され、生活習慣病の予防につながるとのこと。また芝の上を歩くことで膝の負担も少なくケガもしにくいといいます。

諏訪東京理科大学・共通教育センターの篠原菊紀教授は、ゴルフは脳の働きの低下の予防や認知症予防につながるという。ゴルフは前頭葉を活性化できる最適なスポーツだそうです。脳の活動状況を測定したところ、1スイングだけで前頭葉が活性化され、カップインをイメージすることで前頭葉が活動していました。篠原教授直伝の予測能力・判断力が高まる脳トレを紹介しています。

スウェーデン・カロリンス研究所の発表によると、ゴルファーの死亡率がゴルフをしない人より死亡率が40%低いといいます。これは寿命が5年長いことに相当します。さらにゴルフがうまい人ほど長生きするといっています。ゴルフに隠された健康効果をこの番組ではたっぷり紹介されています。関心のある方は、ぜひご覧ください。

奈良柳生カントリークラブのメンバーでこの番組を視聴したい方には、DVDを貸し出ししますのでフロントにお申し付けください。